

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 大野 謙三

本論文は、近世宿場町に着目し、その空間の実相に迫ることを目的とした研究である。(1)江戸期を通しての宿駅空間の変容、(2)宿駅屋敷地割と社会との関係性、(3)宿駅空間とその背後に控える農業空間との関係性、という3つの観点を主軸に、主に文書史料と絵図史料を用いて、近世宿場町の空間構造を明らかにしようとした研究である。

本研究において特徴的なのは、江戸期の宿場町の空間的な変容を、宿駅背後の耕地空間を視野に入れながら、地割に着目して研究した点にある。そうした視点にもとづき、本研究では中山道宿場町の中から上州坂本宿と木曾妻籠宿を主要な研究対象としている。

本論は、「序章」「第1章～第5章」「結章」からなる構成となっている。以下、各章の内容を概観する。

序章では、近世宿場町の定義および研究対象となる中山道の概観がなされた。さらに宿場町に関する既往研究の整理がなされた上で、本研究の目的・方法・構成が論じられた。

第1章「坂本宿の駅屋敷地割」では、本論文が研究対象とするひとつ目の宿場町である坂本宿について、江戸後期・末期の坂本宿駅屋敷地割(面積・間口)の変容と実態が具体的に明らかにされた。さらに、屋敷地割(間口)が宿駅社会の一要素である伝馬役との関係性から論じられた。

第2章「坂本宿の村落空間構造」では、宿内の村落空間構成および村落空間の社会との関係性が考察対象となっている。具体的には、宿内枝集落配置構造が明らかにされるとともに、宿駅の領域内における集落と耕作地の配置、屋敷地と耕作地の地割、屋敷地面積種別と耕作地面積および耕作地位置の関係について論じられた。

第3章「妻籠宿の宿駅地割の復原」では、現代の国土調査図を祖型として、近代初頭の土地台帳等に拠りながら、近代初頭、江戸末期、江戸中期、江戸前期の宿駅地割図が推定的に復元された。妻籠宿の江戸期の宿絵図は、江戸後期の宿絵

図一葉を確認するのみであるが、江戸期を通しての宿駅空間の変容を考察しようとする、宿絵図もしくはそれとほぼ同等の情報を有する史料が必要となる。そのため本章では、宿駅の屋敷配置についての緻密な史料調査に基づき、基礎的な情報となる妻籠宿の地割復元図が作成された。

第4章「宿駅屋敷地割の変容」では、第3章で作成された妻籠宿の屋敷地割の復元をもとに、宿駅地割を通時的にたどることによって、宿駅屋敷地割の変容が考察された。また限られた年次であるが、当該宿駅の家屋形式についても明らかにされ、町並景観および街区形式についても論じられた。本章末尾では宿駅屋敷地割と社会との関係性についても考察された。

第5章「妻籠宿の村落空間構造」では、本章の重要な史料である『検地帳』の背景ならびに研究史料としての検証を行ったうえで、妻籠宿の村落概要が集計整理され、屋敷と耕作地空間の関係性が、町方と在方および村役人と一般村民の視点から論じられた。さらに、宿内の屋敷、集落および耕作地の配置から枝集落の配置構造を確定し、村落空間構造全体を明らかにした上で、宿駅の在郷町としての性格が論じられた。

結章「宿駅の変容と村落空間構造等」では、本論で論じられてきた坂本、妻籠の両宿の変容および村落空間構造等に関する主要な考察について、特に本論ではじめて指摘した事項を中心に、既往研究および両宿の比較考察により、本論全体のまとめがなされた。

以上のように本論は、近世宿場町として中山道の坂本宿と妻籠宿をとりあげ、とくにその地割の復元という方法に基づいてその空間構造の特質や変容を明らかにした、きわめて独自性の高い論文であり、建築史・都市史分野の研究として重要な成果をあげたものである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。

以上